



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第19号 平成25年11月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

「環境公共」をテーマに農業農村工学会東北支部研修会が開催されました

去る平成25年10月25日、青森市のラ・プラス青い森において「農業農村工学会東北支部研修会」が開催され、県内はもとより、東北各県や遠くは近畿地方から合わせて約120名の研究者や農業土木技術者が参加しました。研修会では、「先代からの遺産、後世への継承～水・土・人を支える『環境公共』～」をテーマに、講演や事例発表が行われました。



研修会場の様子



北里大学の杉浦教授

はじめに、北里大学獣医学部の杉浦教授が、「稲生川開削からユネスコ未来遺産登録まで～受け継がれる開拓精神～」と題して、三本木原台地の開拓の歴史、一本木沢ピオトープやせせらぎ水路などの十和田市民による稲生川周辺環境整備の取組や、これらの取組のユネスコ「プロジェクト未来遺産」登録について講演を行いました。

続いて、環境公共学会の世永会長が、「地域づくりの新しいかたち～環境公共の取組～」と題して講演を行い、「環境公共」の概念、「環境公共コンシェルジュ」などの人財育成、環境公共学会を通じた情報発信などを紹介しました。参加者からは、「環境公共」のような地域での取組を推進する上でのアドバイスを求める声も上がりました。



環境公共学会の世永会長



十三湖土地改良区の江良総括課長

最後に、十三湖土地改良区の江良総括課長が、「環境公共」の現場での取組として、県営高根地区湛水防除事業による排水機場の整備を契機に設置された地区環境公共推進協議会の活動を紹介しました。農業の生産性向上のために事業を推進する一方で、小学生による水路での生き物調査や学習発表会、ワンドづくりなどの環境学習を通じて、地域の生物多様性や生態系を守ることの重要性を子供たちに伝えています。

今回の研修によって、県外の参加者に情報発信できたことで、「環境公共」の全国的な知名度の向上につながることを期待しています。

■「環境公共」事例紹介

ウスメバルの資源回復を目指して ～生息環境の保全・再生の取組～

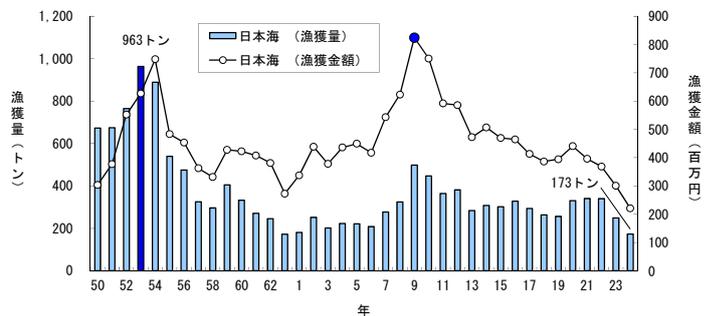
1 はじめに

メバル類のなかでもオレンジ色が鮮やかなウスメバルは、本県が全国の漁獲の約半数を占め、特に中泊町小泊付近で獲れるウスメバルは「海峡メバル」としてブランド化されており、県内のスーパーでは、1匹

1,000円近い値がつくこともある高級魚です。



ウスメバル



ウスメバルの漁獲量、漁獲金額の推移
(出典：未来を育む資源管理 2013 県水産振興課)

ウスメバルは、昭和53年には日本海での漁獲量が963トンありましたが、近年では200～500トン前後で推移しており、漁獲量、漁獲金額ともに減少傾向にあります。

2 ウスメバルの生態



青森県周辺でのウスメバルの主な移動経路

ウスメバルを含めメバル類は、メスの体内で卵をふ化させ、仔魚の状態産む「卵胎生」の特徴があります。春に日本海で産まれたウスメバルは、海面を漂う流れ藻とともに対馬暖流に乗って北上し、初夏には対馬暖流から分かれた津軽暖流に乗って陸奥湾や太平洋にたどり着きます。その後、陸奥湾内にあるホタテガイの養殖施設や太平洋沿岸の藻場などを住み場として成長し、成魚となって日本海へ再び移動します。

3 水産環境整備によるウスメバルの資源回復

ウスメバルの漁獲量は、ピーク時の約2割にまで減少していますが、その理由の1つとして、稚魚の住み場となる藻場の減少などの生息環境の変化があげられます。県では、水産生物の成長段階に合わせた環境を創出する「水産環境整備」という新たな漁場づくりの考え方に基づき、ウスメバルが成長に伴って移動する経路に稚魚を保護する藻場や、成魚の住み場となる魚礁の整備など、ウスメバルの生息環境を保全・再生し、資源回復を図る取組を進めています。

また、これらの取組をさらに進めるため、本年7月には、青森県、秋田県及び山形県の沿岸域における漁場づくりの基本的な考え方を定めたマスタープランを3県共同で策定しました。今後は、3県が連携してウスメバルの資源回復とともに、多くの水産生物が生息する豊かな海の環境づくりに取り組んでいくこととしています。



コンブの藻場に集まるウスメバルの稚魚